様式第２号

会　　議　　録

<table>
<tr><td colspan="2">会議の名称</td><td colspan="3">平成２９年度（２０１７年度）第３回豊中市図書館協議会</td></tr>
<tr><td colspan="2">開催日時</td><td colspan="3">平成３０年（２０１８年）２月２１日（水）１５時００分～１７時００分</td></tr>
<tr><td colspan="2">開催場所</td><td>豊中市立岡町図書館　３階集会室</td><td>公開の可否</td><td>㊀・不可・一部不可</td></tr>
<tr><td colspan="2">事務局</td><td>読書振興課　岡町図書館</td><td>傍聴者数</td><td>２人</td></tr>
<tr><td colspan="2">公開しなかった理由</td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td rowspan="3">出席者</td><td>委員</td><td colspan="3">大野　俊介　岡田 初美　天瀬 惠子　松田 美和子　岸本 岳文　渥美 公秀
瀬戸口 誠　有本 恵子</td></tr>
<tr><td>事務局</td><td colspan="3">吉田教育委員会事務局長　北風岡町図書館長　須藤庄内図書館長
虎杖千里図書館長　松井野畑図書館長　山根岡町図書館副館長
永島岡町図書館副館長　河本岡町図書館主査</td></tr>
<tr><td>その他</td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td colspan="2">議題</td><td colspan="3">1. 豊中市立図書館における中央館構想について
2. その他</td></tr>
<tr><td colspan="2">審議等の概要
（主な発言要旨）</td><td colspan="3">別紙のとおり</td></tr>
</table>

平成２９年度（２０１７年度）第３回図書館協議会

日時：平成３０年（２０１８年）２月２１日（水）１５時～１７時
場所：豊中市立岡町図書館　３階集会室
出席者：（敬称略）
　委　員　　大野　岡田　天瀬　松田　岸本（委員長）　渥美　瀬戸口　有本
　事務局　　吉田　北風　須藤　虎杖　松井　山根　永島　河本

●委員長
　それではお手元の次第に沿って議事を進めさせていただくが、ここで図書館協議会の運営方法について、委員の皆様にご了承いただきたい。図書館協議会の運営方法として、豊中市では原則的に会議を公開しており、傍聴については 10 人を定員にしているが、定員を超えた場合の傍聴者の人数については、その時の状況を見ながら私の方で判断させていただくということでよろしいか。なお傍聴の方にはアンケートをお願いしており、協議会を傍聴されてのご意見等をお伺いし、特に委員の皆様にもお伝えすべき内容については、後ほど報告させてもらう。なお、傍聴席の資料は館内閲覧のみでお願いしたい。
　次に前回会議録については事前に送付されたものに委員の方々のご意見はなかったので、公開の際にはお手元の記録と同じように、概要として発言者については個人名を掲載せず、「委員」とのみ表記することを了承いただきたい。
さっそく議事に入る。本日の議題は「豊中市立図書館における中央館構想について」となるので、資料１をご覧いただきたい。事務局から説明をお願いする。

●事務局
　まず資料説明の前に、これまで２回のご議論をいただいたところで、今一度事務局の提案の趣旨を確認のため説明させていただきたい。現状において４地域館を中心とした体制が、今とくに破綻をしているということではないが、１回目に施設活用課長から公共施設の総合管理計画の説明があったように、将来にわたり安定して市の公共施設を維持運営していくためには、計画的に取り組んでいくことが必要であり、施設総量として床面積の２割削減に向けて、将来にわたっての計画を作っておかないと、無計画に図書館が減ってしまうというおそれもある。この先、現状のままということは、難しい状況であると考えている。中央図書館に関しては現段階では時期も含めて出来るかどうかが決まっているわけではないが、南部コラボセンター開館後のありようについて、中央館機能を持った図書館を核とする施設配置の検討が必要であると考えている。現状の資源のなかで、サービスを維持向上するためには、どうシステムとして機能させるか

が重要であり、それにはシステムの核となるものが必要であると考え、それを具体化するものとして中央館機能を提案している次第である。

続いて資料１の説明をさせていただく。事前送付させていただいたが、本日少し修正を加えたものを配布しているので、当日資料の方をご覧いただきたい。委員から表現等で少し解りにくいところがあるとご意見をいただき修正を加えたが、内容的に大きく変更したものではない。

資料１は、２回目に事務局がお示ししたA3縦長の資料、左から課題の欄、中央館機能の欄、右端にアウトカムの欄をあらわした表をもとに、真ん中の欄の中央館機能を分かりやすく図示し、中央館があることで実現できることを抜粋して再構成したものである。これは、全域サービスについて機能面で示したもので、左の方の四角は、「中央図書館機能」を“人材”“資料”“運営”の面で示している。“人材”については、例えばオール豊中の人員体制や長期的な人材育成、“資料”面については全館の蔵書をトータルコーディネートし充実の蔵書構成を可能とすること、またオール豊中での選書・保存・除籍までの一元管理、こういったことが図書館として行いやすくなると考えている。また“運営”面においては、市民協働・連携調整・全館の一体的なPR戦略、そして小中学校図書館の支援、こういったものを中心に機能すると考えている。そのなかで特に実現するものとして、色つきの円になっている部分、「高度なレファレンスへの迅速な対応」「複合化した課題への対応」「オール豊中での企画立案・事業実施」「個々のサービスの調整・統括」こういったことが人材・資料・運営等について総体として実現できるものと考えている。全館との関わりにおいては、右の方、千里コラボ・南部コラボ等々と書いているところについては、今回、中央図書館機能の方にスポットをあてたということで次年度以降にまたご議論いただくところと考えている。中央図書館の機能としてはとしては、資料情報の一元管理、レファレンスへの対応、フレキシブルな人の配置、講座や研修の企画等の提案等を想定している。地域館・分館・サービスポイントから中央館へのフィードバックとしては、利用者のニーズ・要望を伝えること、また地域の実情や利用状況を踏まえた事業提案などを想定している。ただここに示しているのは、代表的な部分ということで、この図ですべて示しきれているわけではないが、代表的なところとして分かりやすくお示ししたものである。

●委員長

前回は文章で表現されていたので分かりにくい面があったが、基本的には、今豊中には様々な課題がある、その課題に対応する一つの方法として中央館というものを置いた場合に、様々なことが見えてくるのではないかとまとめていったものということだ。ある意味で今日配られた、中央館機能の中に盛られている

ことは、現状で豊中にとって課題になっている部分の反映と見ることもできるかと思う。そうしたことも踏まえて今日の説明を聞いたうえで、では豊中の中央図書館についてどういった働き、どういったことが期待できるのか、ご意見をいただきたい。前回までの議論を踏まえて、今日の話も聞いたうえで、期待されることを含めてご発言いただきたい。

●委員

中央館機能という考え方については先ほどの説明でよく分かった。期待することという面においては、具体的にどうというところまで整理できていないが、何か問題が起きたときに、スムーズに問題を解決するために、必要な司令塔的な役割も担うような中央館があったらいいと思う。これまで地域館４館でやってきているが、何か問題が発生したときに、各館が考えるのでなく、司令塔の役割のところがぱっと対応してくれる、ぱっと指示をしてくれると、スムーズに早く問題解決ができると予想できる。スムーズな対応が可能になる中央館ということを期待する。ただ、各分館も頑張っているわけなので、中央館が立派になればなるほど、まわりの分館でのサービスが低下することがないよう、豊中市民としては望む。

●委員

このイメージ図だけでは、なかなか具体的にどういう形になっていくのか、あまりピンときていない。今それぞれの図書館でやっていることを、ある程度豊中市としてどうしていかなければならないかというところを担っていくという意味では、中央図書館というのは非常に役に立つというか、あったほうがいいのかなと思っているが、中央図書館として実際に作られていくものというのがどんな形なのか、まだ自分の中でイメージがないので、あればいいなという感じだ。ただ、レファレンス対応も含めて、中央図書館がある程度人材を育てていくということで、他の図書館の機能が十分に果たせるようになるということについても、やはり中央図書館があったほうがいいのかなと思う。ただ器であるとか、いろんなものがどうなっていくのかというところで、本当にそれだけのものを担える規模のものが作れるのかということも気になっている。

●委員

中央図書館は、地域のそれぞれの図書館の総まとめという部分を担うというところで、資料１にも全館の蔵書をトータルコーディネートしていくとの記載があるが、全部の図書館で今どのようなものがあるか把握しながら、足りないところを考えてこういう蔵書も要るのではないかなど、いろんなニーズに合わせ

ながら発信もしていけると思うので、そういう役目を担っていくのかなと思う。中央図書館の機能の充実を図るとともに、地域に根ざしたそれぞれの地域性もやはり大事にしながら、市民のニーズにあわせたものを取り組んでいってほしいと思う。

●委員

どんな意見を言えばいいのかピンときていないところがある。この概念図ができたところで、皆さんおっしゃったことは、具体的にこの図の中の言葉が示すイメージがピンとこないというところかと思う。さしつかえなければ、図書館の方が今考えておられる各項目のイメージ、具体的に人数、内容等細かいところまではいいのですが、例えば一つの図書館を例に挙げていただいてもよいが、それぞれの言葉が示している具体的イメージというのを少し説明していただけるとありがたい。私たちもこの概念図でいいよね、悪いよねというくらいしか意見が言いにくいところでもあるので、もう少し説明していただけるとありがたい。

●事務局

先ほども申し上げたように、館の規模や場所が具体的に決まっているわけではない。あくまでも「中央図書館機能」という話しかできないので、抽象的にならざるを得ないのだが。ただ現状から考えると、今４地域館が中心になって分館を見るという４地域館体制をとっており、そのなかでも、岡町図書館が主にアウトリーチの部分、動く図書館や団体貸出などの全館サービスの拠点機能を持っている。また野畑図書館は、全館の選書から書庫の機能まで資料面の全館的な役割を担っている。そういったところを一元化して、まとめて中央館として機能するというイメージであると同時に、エリアの図書館としての役割もあるので、どこにできるかは別として、そのエリアでの貸出等を含むサービスを担うということになる。またレファレンスサービスについては、岡町・千里・野畑の３館にそれぞれ人と資料を配置して行っているものを、一元化して、より高度なレファレンスに対応できるような体制を作る、そういったことをイメージしている。

●委員

今説明いただいたのは、現状についての話かと思う。皆さんおそらく、ここに描かれたことが実現したときのイメージ、よく町並みを変えようといった場合に、こんな風になりますよというイメージ図があるように、全部が実現しなくても良いのだが、これが実現したらどんな風な図書館なのかというところが、言葉だけではまだイメージが湧かないということかと思う。おそらくそのイメージがあったからこそ、ここに描かれた言葉が出てきたと思う。それをもう少し話し

ていただけるとよい。先ほど委員がお話されたような、4館だとトラブルが発生した時に意思決定に時間がかかるというようなケース、具体的にはどういうことか。具体的にそういう事例が過去にあったのだろうか。実現したあかつきには、それがどういうふうになるのかもイメージが湧きやすくなるかと思う。

●委員

過去にトラブルがあったかどうかは分からないが、自分のイメージとしては、例えば、司書がたくさん欠員となってしまったとか、急に何か問題が起きて建物が使えなくなってしまったとか、そういう時に司令塔のような存在が指示をしていく、そういうことがしっかりできればいいということで言った。自分のイメージのなかでは、市役所と同じで、豊中市役所があって千里・庄内に出張所がある、そのイメージに近いのかなと思うが、それでよいか。やればやるほどそういうイメージに近づくように思うが。

●事務局

市役所全体との比較についてはなんとも言い切れないが、図書館は現在の体制でも、ネットワークを大事にしてやっているので、そういった意味で、抽象的な言い方にはなるが、より一体的な運営というか、中央館と個々の館との関係はより有機的なものになると思っている。

●委員

例えば資料の運営の部分で、「市民協働」とか「とよなかブックプラネット事業」とかがあり、「一体的なPR戦略」ということが描かれている。一つ一つ単体でやっていくより、一緒に何かイベントをやるとか、PRにしても関連して載せていくのがいいと思うが、動員人数を増やすとか、今まで関心がなかった方を呼び込むことにつながる糸口が見つかるとか、そういうことが目的なのか。今はラベリング的に言葉で置かれているが、必ずイメージが先行してあると思うので、少し泥臭くてもかまわないので、中央図書館機能の担い手というのは図書館職員になるので、図書館の方が持っているイメージをもう少し具体的に、こういうことになっていくと示していただけたらと思う。小さな事例からでも膨らませて考えていければと思うが。

●委員長

分かりやすい部分として、蔵書の問題がある。特にレファレンス機能を充実させるといった時に、それぞれの図書館が持っているレファレンスコレクション、これがどの程度まで中央館になれば充実していけるのか。おおざっぱなイメー

ジで言えば、例えばどこそこの図書館のレファレンスコレクションくらいにはなる、というイメージがあればよいと思う。開架の部分については、施設全体が決まってこないと冊数などは分からないが、保存機能について、今どのくらい豊中全体でできているのか、これが一元的に管理できていないとすれば、例えば雑誌のバックナンバーなどはどの程度まできちんと保管していけるようになるのかといったことを含めた保存の部分については、ある程度推移など把握して必要なものを挙げることができると思う。できれば少し規模の大きな図書館の書庫のイメージなども提示して、これも今と比較をすれば分かりやすいものになるかと思う。運営のあたりは、おそらく今それぞれの図書館が担っていて、それぞれに人が張り付いて行っている部分、これは中央館ができ、そこに専任の PR 担当を置くとすれば、今までばらばらにやっていたものについての統一的なものがはかれるだろうといった形で出せるかと思う。

先ほど委員の発言にあったリスクマネージメントやクライシスマネージメントの部分は、基本的に組織としてどう一体的な対応をするかが一番問われる部分になる。それぞれがばらばらな対応をしてしまったら、問題を大きくしてしまう。そういう部分は確かに弱い可能性がある。各館が責任を持って対応するというのはいいが、豊中市立図書館としての危機管理ということを考えた場合に、最終的に責任を持って組織として一体的に対応できるかというと、若干不安がなきにしもあらずだと思うので、中央館的なものになれば、組織的な対応強化につながるだろうというイメージを持っている。そのあたりは目に見える形で出せないけれども、一つの組織をどういった組織に作っていくかというイメージはできると思う。豊中市に中央館を置いたときの人的な組織体制についても一定のイメージを作っていくと、もう少し具体的になっていくと思う。そのなかで、例えばPRについて誰がどう担当してどのように分担していくかといったことも含めて、少し出していってもいいかなと思う。

それとあわせて、さっき委員が言われたように、中央館ができたときの少し具体的なイメージとして、私だったらせめて豊中の中央館というならこういうのが欲しいという話を、規模についても開架の部分については大阪市立中央図書館とまではいかなくても、あれの３階分くらいは欲しいとかいう風な感じで、市民の立場として中央館というからには、目の前にこれだけのものが見られるという施設が欲しいし、これだけの本のボリュームに出会いたいといった希望をここで出していくのも必要だと思う。そのあたりをお互いにキャッチボールしながら具体的なイメージをもう少し作っていかないといけない。先ほどから具体的なイメージがないというご指摘が続いているが、こちらからも期待をするものについてのイメージを出していきながらキャッチボールしてもよいと思う。

●委員

前回資料の表をいただき、今回資料で新しい図を見て少し安心したのが、前回資料から受けた印象では、千里コラボ・南部コラボ・分館・サービスポイントが貸出のみの機能で、全部中央に寄せてしまって…みたいなことになるのかなと不安だった。先ほど事務局から、各分館なりコラボなりの機能のことはこれから話をするということだったが、やはり市民協働の本体は運営の方にあっていいけれども、地域の課題というのはやはり地域館で現場の方が大事かなと思うので、何もかもを中央館に持ってきて、それが果たしていいのかをすごく疑問に思っていた。すると、ちゃんと地域の実績や利用状況を踏まえた事業提案が各館からも挙がってくるように、新しい資料には明記されていたので、それならばさっき言ったような心配もないのかなと思った。今イメージがしにくいという話が出ていたが、今までも豊中の図書館は各館で分担し、PR は蛍池の方で全市的に考えていたし、選書も野畑で全市的なことを考えて行っていた。それを中央館に持ってくるということだけだろうなと受け止めた。お互いのつながりが、各館に分かれているより一つになることで、機能的に相乗効果があればいいのかなというイメージを持った。私が一番心配しているのは、全国的にまた大阪府内でもよくあるが、中央館はしっかり作るかわりに、分館はもう指定管理で貸出のみ…みたいな、引き換え条件のようにする自治体も増えてきていることだ。豊中は、これまでの図書館の積み上げてきた道のり、市民と共に来た歴史的な積み重ねがあるので、それでは困るし残念だと思うので、安易な人減らしの方向にはなってほしくないという思いが強くある。南部コラボも昨年度、図書館を核とした地域の施設というふうに考えてきたように、ある程度千里コラボ・南部コラボ・分館も、その役割をしっかり考えて、単に効率ばかりを追うのではなくて、豊中らしい中央館と分館のあり方というのをしっかり考えていくべきだと思う。

●委員

毎回同じことになるが、人材の育成面のところで、インターネットの利用が拡がり、これからの図書館が図書館自体を社会のなかでどう位置づけていくかということが非常に大事になってくる。従来の図書館資料の提供は非常に大事ではあるが、ただ現状いろんなネットワーク情報源等がたくさん増えていくと、図書館自身が従来やってきた機能というのが、人によってはあまり重要ではなくなってきて、図書館というものの社会的な役割がある程度変化していくだろう。豊中の図書館として、そういった状況のなかで図書館の機能や役割をどう担わせていくかが非常に大事になり、これは長期的な人材育成と関わってくると思う。図書館に対してどういう機能を持たせるか、従来からのレファレンスからさらに踏み込んで、学びに対する一歩踏み込んだ関与とか、「とよなかブックプラ

ネット事業」みたいなものにしっかり連動していくこと、学校は担当部局が違い難しいところがあるのかもしれないが、そういったところとの関係性を図書館の方から何らかの形で主体的に支援していくというようなことが、将来的に言うと、学校とか社会との学びの接続みたいなものにつながっていくのかなと思う。そういった意味で豊中的な人材育成のプランを、中央館機能のところで、将来の図書館像というものをしっかり持ったうえで考えていくことが必要だ。従来のという際の「従来」が何を指しているかにも幅があるが、多くの人が一般的に持っている図書館イメージではなくて、現状の中で図書館が担う役割や機能というところに立ったうえで、中央館機能というのを考えていく必要があるのではないかと思った。

●委員長

図書館が持っている社会的な役割が、これから大きく変わって行かざるを得ないだろうといったことも踏まえたうえで、将来的な位置づけをすること、これは中央館機能を語るなかでも押さえておかねばならないことだろうと思う。今のお話を聞いていて思い浮かべたことだが、ついこの間京都の亀岡だったか、地域のまちづくりをしている人達が図書館でいろいろ調べものをするという取り組みをやったという。自分達が持っている課題についての必要な資料を、図書館のレファレンス機能を使いながら。当然図書館の職員がレファレンスという形で対応して、皆さんが図書館を使ってみて、非常に良い資料が見つかって良かったといった感想を述べられたという話を聞いた。

今、全国的に公民館が非常に弱体化している部分があり、社会教育というのは大きく変わって行かざるを得ないだろうと思う。そのなかで、どこともまちづくりとの関わりが聞かれるようだが、おそらく社会教育のなかで公民館の役割が変化していくなかで、図書館の持っている力というのは、ますます重要なものになってくるだろう。とすると、さっき委員がおっしゃったような、社会・地域において図書館が持っている意味は、ますます変化してくるし、重要になってくるだろう点を踏まえたうえで、そこに応えていくために、今の体制と中央館といったことをどう押さえていくかということが必要になってくるだろう。

先ほど言われたような他市の事例もあって、中央館構想といった計画そのものが非常に不安要素を抱えたものにならざるを得ないという話があった。前回の委員のお話しのなかにも、「災害が起こったときに、近くに居る人が逃げろと言わないと誰も聞かないよ」という話があったが、今議論していることは、そのことをより意味のあるものにしていくためのことだろうと思う。声をあげる人がバラバラになっていていいのかというと、そうではないし、当然そこには正確な情報を伝えるためのセンター的な機能も必要になってくる。おそらくその兼

ね合い、バランスといったものを含めての議論だろうと思う。中央館の議論というのは、中央館をどうするかということではなくて、基本的には「豊中の図書館全体をどのように良くしていくか」という議論でなくてはいけない。それは基本的にまた豊中にとっては特にそうだが、地域館や分館がますます良くならなければ意味がないことだろうと思う。中央館の議論をするということは、最初事務局からの話があったように、この後また地域館や分館についての議論をしていくが、そこをきちんと押さえておかないと実りのある議論にならないだろう。少しそのあたりの、センターと身近なところにある様々な働きとの関わりといったものを含めて、渥美委員にご意見を伺いたい。

●委員

この前は表だった資料が図になって、分かりやすくなったと思う。誤解している部分もあるかもしれないが、自分の理解で話をしてみたい。

「中央図書館」と聞いて、岡町図書館以外にすごいビルが豊中駅前にでも建つのかと思うと、間違いの元だろうと思う。なぜなら「機能」と書いてあるから。これも難しい言葉だが、「働き」だけを求めているということ。だからイメージと言っても、例えば「胃」は「消化する機能」を持っているが、機能のイメージと言ってもなかなか難しい。だから、なかなか理解が難しいなと思って資料を見ていた。この中央館機能をつくると、地元が不要になるわけではない。そういう図ではなくて、地元を良くするための機能をここにまとめてみましたという意味で読まないといけないと思う。あくまでも主役は、この図でいうと右側に書かれた千里コラボ・南部コラボ・分館とかとなるが、この図の表し方にいろいろ問題があると思っている。中央館機能を虫眼鏡で覗くように拡大するからこのようになるわけで、本当は右側の方が大きい。というのは市民が利用するのは、それぞれの身近なところになるのだから。図を少し描きかえるだけでずいぶん分かりやすいものになるかもしれない。このままだと左側の中央館機能が大きくて右側が小さくて、右側に切取線でも入っていて切り取れるように見えてしまう。しかし、これは元々何の話かというと、市有施設をなんとか集約化していくことができないかという市の現状からスタートしている。今の図だとこれ幸いと右側が切られてしまったら本末転倒になり、本来は右側が大切な図のはずだ。それをするために中央図書館機能で何をするかというところが、この図だと理解した方がよい。繰り返しになるが、あくまで大切なのは右側の地元の市民が利用するところこそが大事だということである。もちろん市民も盛り上げていかなければならないだろうし、PR も欠かせないと思う。今後議論になるということだが、右側の図をこんなに整然と描かずに、いっぱいつながっている図を描いた方が、どれを抜いてもいけないぞという図にした方がよいような気がする。あ

るいは他市の事例があるようならば、地元の各地区にある図書館機能を削ったためにえらいことになったみたいな例を入れておいたらよいように思う。そうならないために、右側をとにかく重視した図にすることが必要だろう。災害の視点からばかりものを言って申し訳ないが、これとよく似た議論がある。やはり災害市民活動をしていると、機能を重視したいという人が出てくる。自分達はつなぐ機能だからとか、自分達は全体をコーディネートするからとか言って独立する。そういうことばかりやっていると、今後いざという時に役にたたないし、機能しない。この中央図書館機能が優れているのは、図には見えていないが、結局この下に岡町図書館があるから。ちゃんと岡町図書館が地元密着でやっているその上にこういう働きをすると言っているからで、岡町がなくなるわけではないし、そのなかであちこちに散らばっていたものを寄せてきて、たまたま岡町だけどすごいビルが建つのではなく、人材育成も、この中で人材育成しますと書いているのではなくて、長期的な人材育成のことについて考えてくれる。それを例えば今回は千里に持って行ったりする機能をやろうということ。そういうふうに見るといいのではないかと、理解したつもりになった。くどいけれども、図は描き変えた方がよいと思う。ただこういうことで問題になるのは、さっき震災のことを言いかけて忘れていたが、震災でいろいろなボランティアがいるから、全部つないでいきましょう、私達がつなぎ役になりますと言ったところは、だいぶ私も言ったりしたが、もう救援活動など辞めてしまった。辞めてしまって、つなぐことが大事なことだからと「機能」に特化しますといってやりだした。すると抽象的な議論が多くなる。「救援とは何か」とか。「何か」と言っている間に早く水を配ってあげてくれと思うが、そういうところがなくなっていく。そういうふうに、これがなっていくとよくないと思う。コーディネートのことも分かるし、レファレンスのこともよく分かるが、実際に本を借りに来た人・利用しに来た人と会ったことがないなんてことはありえないと思うし、これは中央図書館という言葉を使っているが、実際はこの岡町だろうと思うが、そういうふうにやられるとすれば、周囲がよりよくなるように、実際の活動はずっと続けながら、そういう機能を充実させるという図だと思えば、なんやかや言いながら時代が変わってくると、分館とかもうやめた方がいいじゃないかという意見も、豊中市でさえ出てくるかもしれない時に、いやいやそういうことをしたらあかんよというための中央図書館機能だろうと思っている。注意点は、やはりそうは言いながら、「中央」になってくると、ここが「支配している」みたいになるといけない。あくまで出先が何よりも優先であるということが守られるような仕組みが要るかなと思う。今朝もそういう議論を別の市でしてきたところだが、それは図書館ではなく災害の方だが、この「中央機能」はよく言うことだけれども、これの充実は、ひょっとすると間接支配の充実になるから、そこだけを止められる機能を作

っておかなければならないと思う。人材を入れ換えるとか、あくまで常に出先の人と一緒にサインしないと物事が進まないとか、何か仕組みをつくれば良いと思うが、そういうきっかけになると思ってみれば、そうそう不自然ではないし、今後長期的に見ればいいアイディアなのかなと、勝手な読み取りではあるが思って見た次第である。

●委員長

委員も念押しされているように、あくまでも図書館の仕事というのは、基本的には利用者と接しているカウンターの仕事が基本になるし、そこでいかに一人ひとりの職員が働き甲斐を持って仕事していけるようになるか、これを抜きにしては意味のない話になってしまうのは当然のことだろう。おっしゃるように、どうしても役所の場合「本庁」と「出先」という言葉がよく使われるように、本庁がいろいろな指示を出して出先がその指示に従って汗をかいているだけという格好になるが、図書館というのはそうしたことでは成り立たないもので、やはり基本的には利用者と接しているところから様々な課題もニーズも挙がってくるし、そこで掬い上げたことにいかに応えていく仕組みを作っていくなかで、仕事というのが生まれてくるので、そこを抜きにしてしまっては、図書館そのものの仕事が成り立たなくなっていくだろう。そういった意味では、中央館と分館を「中央」「出先」という形で捉えるということはないと思うが、図書館の中では当然そうだとしても、なかなか外部からはそう見られないところがある。そのなかでは、今委員がおっしゃったように、現状で今地域館や分館が本当に地域とつながっていることを、前に一度豊中の図書館の様々な地域活動とのつながりを図にしたものがあったが、ああいったものをきちんとそこに組み込むような形で、それがより太いものになっていくというような絵が作れるといいかなと思う。今の話を受けた形で、もう少し地域館や分館のことも含めて、どういったことを押さえておいてほしいということも入れながら、ご意見をうかがいたい。

●委員

具体的にというと少し的外れになるかもしれないが、誰がどこの館に行っても、だいたい同じようなサービスが受けられるというところは、欠かせないと思う。例えばビジネス・就労支援とか医療健康情報とか各館で特色を出しているところについては、子育て支援で特色を出しているところであっても、就労支援のところの本を借りたいときにはほぼ同じようなサービスが受けられるようにしてほしい。

●委員長

図書館は特色を出すというのが結構難しい。利用者が地域ごとにそれほど異なったニーズを持って暮らしているわけではないので。日常的なニーズはそれほど変わらないので、そうしたなかで特色をつくるというのは、かなり難しい部分が出てくる。が、同時にそれぞれの地域館や分館がまったくイコールでよいかというと決してそうではなくて、複数の図書館を使ってというような利用の仕方を考えると、違いをどう作っていくか、そのあたり中央館というものを真ん中に置くと、少し見え易いものとして作ることができるかもしれないと思う。

●委員

小中学校の立場から言えば、いろいろな行事を図書館でしてもらっている。「知的探究合戦めざせ！図書館の達人」や「子ども読書活動フォーラム」等。会場に行くと多くの小学生を中心とした小中学生が参加しており、本に触れ合う機会をつくってもらっていると思う。そういう意味では、中央図書館機能のなかで、「とよなかブックプラネット事業」というのも入っているが、PR も含めて小中学生に向けて、本に戻ってきてもらうというか、本に親しむ機会というのをいろんな形で作るなど、実際に「知的探究合戦めざせ！図書館の達人」も各館に取り組みがひろがっているので、そういったところをさらに組み立てていってもらうと、子ども達の本離れも少しはましになるのかなと思ったりしている。今日たまたま全国学力学習状況調査の結果が来ていた。「読書は好きですか」という質問項目について、小学校でいうと、「とても好きである」というのが豊中市では 49.1%。全国では 49.0%。「どちらかといえば好きである」を含めたら、ほぼ同数で 73%くらい。中学校になると若干下がって、豊中市では 64%。全国では 69%ということで、豊中市の中学生の読書好きが若干低かったりする。さらに「昼休みや放課後、学校が休みの日に本を読んだり借りたりするために学校図書室・学校図書館や地域の図書館にどのくらい行きますか」という質問については、「月に１～３回」というところまで入れて、豊中市が 40%行かない。全国もほぼ同じ。中学生になると、これが 25～6%。全国よりは多いが、この辺を食い止めるためにもぜひ PR とか、「とよなかブックプラネット事業」のなかで、打って出て行ってもらいたい。そういうプランニングをするためにも、中央図書館機能というのは非常に重要ではないかと考えている。それから、この図のなかでいう「レファレンス対応」とか、「フレキシブルな人の配置」というのが、具体にどういうことなのか分からないので、何か具体的なイメージがあるのならば、教えてほしい。

●事務局

人員体制の方は、その時期に人手が必要であるという場合などに柔軟に、中央

からそこに人を配置することを想定している。そのためには、ある程度の余裕を持った中央図書館が必要である。今は４地域館にそれぞれ分散しているので、例えば東豊中で人が必要な時、まず地域館である千里が対応する体制をとっているが、千里で人を出すのが無理な場合は、次はどこが可能であるかを順々に考えて応援体制をとっている。そういうところを一元的に中央館で担えるだろう。

レファレンスについては、どこの館でも均質なサービスをということにも少し関わるが、レファレンスの受付、市民の方のニーズを受け止めるのは、どこの館でも一緒と考えている。ただ、その場ですぐに対応するのには館によって難しい場合が出てくる。それは先程委員がおっしゃったように、本の資料だけではなくて、有料データベースなど多様な情報を含めて回答していくということが必要になってくるので、集約して効率的にせざるを得ない。もちろんそこについての人材育成も含めて、より効果的な体制を組んでいくために、中央図書館で受け持つ。地域の各館で受け止めたレファレンスを、中央館がバックアップして回答をそれぞれの地域の館に戻して、そこで利用者に伝える等といったイメージを持っている。

●委員長

ちょうど今蔵書の点検をされているが、蔵書の点検はそれぞれの館の職員だけで行っているのか。

●事務局

基本的にはそれぞれの館の職員中心で行っているが、野畑の書庫はやはり数も多いので、全館からの応援体制を組んでやっている。

●委員長

そのあたりも今の話でいうとそれぞれの図書館の規模にあわせて、中央の方で一定の人数をもって、これを調整しながら最も効果的に配置できるといったことも可能になるととらえてよいだろう。レファレンスでは、私の経験も含めて申し上げるが、資料が自分のところに無くて利用者に満足いただけるような回答ができないことも当然出てくる。そうすると、沢山資料を持っているところでもう一度調べてもらう、いわゆる協力レファレンスという呼び方をすることもあるが、私は県立図書館にいたので、市町村からそういったレファレンスが上がって来る。実際に市町村からレファレンスが来たときに、質問が来ただけでは調べようがない。やはりその質問がどういった観点で、どの程度のことを知りたいのか、利用者はどの程度事前の知識を持っておられるのか、こういったことが分からないと回答できない質問が回ってくる。基本的には単純な質問ではないの

で。そうすると、もう一度聞き返すと、「利用者がそう言っておられました」と返すだけの図書館員と、「利用者がこういう人で、こういったことを調べて、こういった事情でこういうことを知りたいと言っておられました」と、きちんと利用者の意図を自分で咀嚼したうえで上げてくる職員がいる。基本的にはレファレンスをきちんと地域の館でやるためには、最初に対応する職員に、そうした力をつけておかなければならない。そのことの重要さが分かるためには、おそらくレファレンスコレクションがきちんとあるところで仕事をしないと、やはり無理だ。そうすると、中央館のレファレンスの担当として仕事をした経験を活かして、千里コラボなり南部コラボなりに行ってレファレンスに対応する。そのことによって、おそらく豊中全体のレファレンスの能力の向上が図れるのだと思う。決して中央館で人材を育てる、中央館でレファレンスができる人を育てるということではなくて、そうした中央館でのレファレンスの経験を、それぞれの館で実際に利用者から様々な声を聞き、その場で調べられなくても、おそらく利用者の求めるこういうポイントだったら、こういった資料があるはずだから…という形で、きちんと資料をイメージしながら利用者と対応したうえで、中央館にレファレンスを回していくといったことが可能になる。そうしないと、中央館でレファレンスする人だけの力がついても、これは意味がない話である。おそらく人材育成というのは、先ほど長期的な人材育成ということで委員の発言があったが、基本的にはそれぞれの図書館できちんと力を持った仕事をしていけるように、というようなことを踏まえて、そこに中央館の機能をどうからめていくかというようなところで、捉えるべきことかと思う。

一つ訊ねておきたいが、例えば、学校と図書館の関わりということでいくと、今はだいたい地域館や分館でいろいろなやり取りをされているのか。

●事務局

今、とよなかブックプラネット事業として行っている学校図書館と公共図書館との連携は、主に読書振興課が担っている。ただ、全校をエリアごとに分けて、それぞれの館の担当校というものを決めて、学校図書館からのレファレンスや資料要求などのやり取りは、各館の分担でやっている。

●委員長

とりあえず、読書振興課でやっている部分について、これをさらに厚みのあるものにしていくことが、ここで想定されていることなのか。

●事務局

このことについては、ある程度、すでに行っていることをそのまま引き継ぐと

いうイメージを持っている。
●委員長
　このあたりで、もしこんなふうに中央館的な形になるとしたら、ご要望などあれば出してほしい。

●委員
　中学校の実態で言えば（勤務校の場合だが）、学校図書館には結構生徒が来るが、偏りがあるというか、来る子は来るし、来ない子は来ない。この来ない子たちをどう引きずり込むかというところが、すごく難しい。例えば、学校図書館でいろんな行事を組んでいるが、行く子は行くし、行かない子は行かない。そこの所が課題になっている。学校でも司書教諭や学校司書などが、連携しながらやっているけれども、もっと生徒を引きずり込めたらいいなというふうに思っている。具体的にどうするかという妙案はないです。

●委員長
　そうした学校現場で抱えておられる様々なことの意見交換などをより緊密にしていける場の設定をしていくことが、一つ押さえておくべきことだと思う。先ほどの読書の調査では数字がそれほど目立って上がっているわけではないですね。統計の数値は、そういうものかもしれませんね。

●委員
　先ほどの中央図書館機能イメージの右側の部分が大事だという話を聞いて、すっと入ってきた。やはり地域の図書館があってこそ、中央があるという部分がすごく納得したところだ。地域の図書館を利用してある本を探してもらう時に、それが中央にあがって「ありますよ」とパッと帰ってくる。そういう情報がすばやく迅速に動いて、市民が待たされることが少なく利用しやすくなることも考えられる。図書館ごとに様々なところと連携しながら、「ここにないから、ありますか」というような問合せなどもされていると思うが、それが一つに集約することで情報共有がより進んでいけるのではと期待している。また、読書についての話になるが勤務しているこども園では、本の総数が多く週１回子どもたちが好きな絵本を選んで、家に持ち帰り自分で読んだり、親子で読んだりする機会を設けている。本を借りて読むということが年間を通して習慣化していて、日頃から本に親しむ環境を小さいうちから醸成している。図書館と違うかもしれないが、園として読書好きな本好きの子どもをつくっていきたいと考えている。1 月に市が“子どものつぶやき展”というのを開催し、そこにおすすめの絵本コーナーを設置した。これは、各こども園が催事ごとに子どもたちにすすめる絵本を集

約しリストにして、市民にこういう絵本がありますよとアピールしたものだ。その時も、岡町図書館に展示する絵本を依頼しすぐ手配もしてもらい感謝している。今後も連携を取りながら本の紹介などができたらいいなと思う。

●委員長
　こども園で本の購入冊数は年間どれくらいですか。

●委員
　各担任がそのクラスの子どもたちに適した絵本を購入して、部屋や遊戯室の一角にある絵本コーナーで読んだりしている。以前は絵本の部屋があったが、こども園への制度変更（３歳児入園など）で地域の部屋が必要になり、絵本の部屋を転用し地域の親子が遊びに来るところになっている。子育て支援の一環としてその部屋もすごく大事だが、そこに置いていた多くの絵本を、遊戯室がわりと広いことからその一角に絵本コーナーを設置した。子どもたちも遊戯室で保育もするので、いつでも見られる状態にしている、また、家庭でも読んでいただきたいということで絵本の貸出もしている。１７９人の子どもが在籍しているので、人気のある絵本は 5～6 冊複本で用意している。年間購入冊数については、いまは分からないが、いろんな絵本が出てくるので、子どもたちが心豊かに育っていくためにもいろんな絵本を購入している。いい絵本なんかは、子どもだけではなく保護者の方もひっくるめて紹介するようにしている。そうすることで購入するなり図書館に行って借りるなりして、親子が絵本に親しむことが出来るかなと思っているので、そこのところはこども園として発信していける部分ではないかなと考えている。

●委員長
　なぜそのお話を聞いたかというと、中央図書館機能という面から児童サービスを考えると、過去１年間に出版された主な絵本を中央図書館に集めて、こども園などで選書の参考にするなど、そこに先生方が集まって絵本の勉強会とか批評会を、子ども文庫の関係者なども交えて行うことも考えられる。中央図書館に児童書のセンターのようなものがあれば、子どもへのサービスと本に関わる大人に対するサービスをこれまで以上に展開することも可能だろうと思う。

●委員
　思いつきですが、学校で本に親しまない人というと私の中では体育会系の人というイメージがあり、時間的にもいろんな意味で親しみにくいのなと思う。例えば、メンタルトレーニングやフィジカルトレーニングのスポーツの本ばかり

を集めたイベントをやることで、その競技を高めたい人は図書館に足を運ぶのかなと思う。このように、資料 1 の中央図書館機能イメージにある様々な活動の中身を一つずつイメージしながらシミュレーションして走らせて見てはどうか、と思う。仮に今、中央図書館だったらこういう対応をするよねという感じで、モデルケースを組み立てて、とてもじゃないけど無理だとか、こういうのだったら出来そうとか、別の道が見えて来るとか、そういうのがあるような気がします。例えば、先程のこども園の話でも３歳児が入園する際、いきなり３歳児に適した絵本を選ぶとなったら悩みますよね。その時に、図書館の専門性を活かして絵本の選書の支援や書架配置などで、うまく連携できれば心強いのではと感じた。実際に課題がある委員の方から、いろんな提案を受けて実際にやってみて具体的につめていければいいのではと、素人考えではありますが思った。

●委員長

具体的な形で委員の方々に参加していただくというのもあるし、例えば、この協議会の会場を岡町ではなく別のところでやりながら、実際に地域館や分館についての具体的な課題、こういったものを目にしていただく、といった場をつくるというのも一つの方法として考えられる。来年度については、そうした試みをやりながら議論を膨らませられればいいと思う。

●委員

こんな機能を重視してくださいという要望だが、従来の図書館の機能では豊中は本当に良く頑張っていて、学校司書も色々工夫をしているが、その連携を高めていくことも必要だが、先ほど委員の発言にもあった図書館の在り方とか社会的な役割や情報リテラシーおよび ICT 教育など、レファレンスだけでなくそういう情報全体をコントロールできるような人材をどんどん育成してほしい。図書館にそういう人材が配置されていることが、これからの子どもたちや中・高生にも、とても大事なことになってくるので、そこをしっかり図書館が中心になってやっていってほしい。

●委員

他の委員の発言もあったが、読書に対しての向きあい方という意味で、子どもたちの読書経験に非常に個人差があるというのは理解できる。社会人にとって読書は、例えば、300 ページある本を読了して、じゃ何だったのと問われてもこれといったものがなく、あまり効率のよいものではないが、一方インターネットでは、非常に簡単に効率よく答えが出てくるように、社会全体もどちらかというと効率よく動くことがよいとされている。しかし、実際生活していくうえで何が

大事かというと、一見無駄に見えることが、割と何かに役立つ事がある。実際に学びの話でいうと、読書していて一見それと関係のないところで考えをめぐらして、結果的には何かを学ぶとか、思考するときに役立つことがある。そういったことが、過去に図書館利用や読書経験のある人は、多分何かあったときには、最終的にそこに戻ってくることが出来るのではないかと考えている。他方その経験があまりない人に対して、たとえ図書館のほうでPRしても、読書に対する向き合いかたがある程度固まっているので少し難しいのではないか思う。今委員から発言があったように、情報リテラシーという観点で、図書館の使い方やそのメリットなどを、広い視野で図書館のほうから提案型のサービスとして考えていくことが必要になってきたと感じている。私自身普段は何か疑問点があれば、すぐスマホなどで検索し時間をかけずになるべく簡単に調べることが多いが、それで分からない場合には、どこを見たら出てくるのか見当がつく。それは、過去の読書なり紙媒体で辞書を使う経験などで、大体そこらへんにあると推測できるからだと思う。しかし、今の学生は小さい頃からネット環境で育ち、紙媒体と言われてもなかなかそのよさが分からないので本当に面倒くさいというのが先に立ってしまう。そのことが実感としてどう役立つかを、大人になってあらためて認識できるようなプログラムを図書館で考えて提案してもらうことを期待している。

●委員長

本を読まない子どもたちが、そのまま大人になった場合を考えると、そのあたりの課題は大きいものがあると思う。小さいときに本を読んだ経験のある子どもは、大学生になって課題レポートを書くための調べものをする場合でもやはり違うと思った経験がある。図書館勤務時に、いくつかの大学が近くにあり、レポート課題が出されるとよく学生が来館し、こういうことを調べたいときちんと聞いてくる学生がいる一方、スマホやケータイを示して「おっちゃん、これ」と先生から出されたレポートの課題をそのまま見せるだけの学生もいる。課題を出されても、どう取組むのかという段階で、小さいときにきちんと本を読んだ経験が、自分なりに考えることができることにつながっているような気がしている。特に中高生の図書館離れや活字離れといわれているが、大学に行って自分で調べなければならなくなったときに、そうした小さい時の読書経験というのは、大きく跳ね返ってくるんだなと、何回かそうした学生さんたちと付き合いのなかで見ていたところがある。先ほどの委員の発言にあったように、大人になって読書経験の不足している人たちに対して、やはり図書館としてなんらかの働きかけをしていくこともこれから必要になってくるだろう。

もう一点は、図書館でOPAC（オパック）と呼ばれるオンライン閲覧目録がで

き Web で予約するのがとても便利になった。以前は、予約は図書館に行って本が貸出中などで書架になかった時などに予約するという形だったが、現状は図書館に行った時にその本が確実にあるようにするためのシステムになっている。実際に予約の件数は増加していて、『日本の図書館』で見ると、図書館が１年間に貸し出した総貸出冊数のうち、予約で貸し出した本の割合が５割を超えているところがある。図書館に行って本を探して選ぶのではなく、Web-OPAC で予約かけて用意ができたという連絡がきたら、図書館に行って借りて帰るだけという図書館利用が結構増えている。しかし、インターネットで便利になったというのは、ある意味非常に不安な要素も多くなってきていることでもある。先程も委員の発言にあったが、ネットで見られる部分というのは、一つの断面を切り取ったものにならざるを得ない。図書館では、本という形で一つの物理的なものの集積があり、その中から物を見ていくことは、やはり図書館でなくてはできない経験になり、そうした知識のありようというのは、多分これからもう一度大切なものになってくると考えている。図書館の果たす役割も重要になってくるだろう。そうしたなかで、いわゆる不読者層の人たちに対して図書館の魅力をどう伝えていくかは、イメージ図の地域館や分館だけでは難しい部分もあるので、そうした働きもここに加筆すべきことかなと、今のお話を聞きながら感じたところだ。

●委員

このイメージ図に関しては先ほど申し上げので、学生ネタを一つお話しする。例えば、５人くらいの学生に、課題のファイルを渡して、このことについて調べ関連する論文のコピーを取り綴じて提出しなさいと言ったら、一人もうまくできなかった。論文は電子的な手段で閲覧しているので、紙媒体で論文を見たことがない。そのため、穴を開けたらずれていたり、論文タイトルの向きもさかさまだったりして、まったくびっくりした経験がある。子どもの時ではなく、今からでもやらないといけないと思っている。図書館利用についてここで議論しているが、大学図書館は非常に専門的なものが揃っているので見に行くかもしれないが、多分市立図書館はあまりよく分かっていないと思うので１回連れてこようかなと思っている学生ネタであった。それから、先ほど図のイメージというのを言われていたが、それもぶっ飛んでしまうかもしれないが、災害復興のときに、物語復興という手法がある。全部がつぶれたけれどこの町がどうなるかという物語を創っていくというものだ。例えば、ジョンとメアリーがいて、一緒に映画を見に行き、映画を見た後に少しアイスクリームぐらい食べたいし、座るベンチがないと困るなどのように勝手に話を膨らませて、そのように町を創っていく、ということをやったところがある。普通は、駐車場は何メートルあるほうがいい

などの要素を図面に落としながら進めるが、先に物語復興をやり、そこには専門家もいて模型を作って太陽がどっちから当たるとか、結構専門的なこともやっている。これのデメリットとしては、たくさんの時間がかかることだ。そんなことも考えていいのかもしれない。これを先程の話と無理やり重ねると、日々の貸出などは絶対にやらなければならないが、そのニーズをちゃんと受け取りながら、ちょっとぶっ飛んだところでやるなら、そういう物語みたいなのを考えてみるのも面白いかもしれない。

●委員長

新年度は、少し視点を変えた形の議論をやってみてもいいかもしれない。委員の皆さんのご意見を聞きながら、いわゆるサービスマネージメントということを思い浮かべていた。これは、仕事をする人をフロントオフィスとバックオフィスというかたちで捉える考え方である。フロントオフィスというのは、実際に利用者・お客さんに対応してサービスを提供する人で、この人たちだけで仕事ができるわけではなく、そこにはバックオフィスの働きが欠かせない。物の仕入れや帳簿をつけるなどの様々な業務がバックオフィスの仕事である。しかし、サービスの仕事のなかでバックオフィスは何のためにあるかというと、フロントオフィスを支えるためにあるということが基本。先ほどの話でいくと、本庁があってフロントオフィスが出先ではなく、サービスマネージメントのなかでは、フロントオフィスが最も重要なもので、それをきちん支えて機能させるための働きとしてのバックオフィスの役割が強調されるわけである。多分今の議論は、そのバックオフィス機能を中央館機能というかたちで集約し、より強固に支えられるようにしていくための議論であるという捉え方もできると思う。そうしたことも踏まえながら中央館の機能のありようを、もう少し違った視点での議論というのを工夫しながら深めていければというふうに思っている。では、あと少し皆さんご意見を伺いたい。

●委員

先ほどのデータで、「図書館にどれくらい行くか」という質問に対して、マイナスイメージの統計だが、「行かない」と回答した子どもが小学校で 32～33％で、中学校になると 53.8％になっている。昼休みや放課後・学校休みの日に、学校図書館や地域の図書館に行かないと豊中の子どもたちが回答している。こんな数字があるということを、データとして知っていただいた上で、どうしていくべきかを考えていただけたらと思い情報提供した。ただ、全国的にまったく本を読まないという子どもは減ってきている。始業前 10 分間は必ず本を読みましょうという朝読書という取り組みを行っている。これをすることで、1 日が静かにス

タートでき、非常にいい学校の取り組みになっている。少なくとも 10 分間は何らかのかたちで先生も一緒に読書をしている。この取り組みは全国的に行われているので、全く本を読まないという子どもというのは減ってきている。しかし、１日の読書時間が 30 分以上になると 30%くらいになる。このへんを、なんとか出来ないかとの思いが強い。もちろん、学校司書もいろんな角度から検証してくれているが学校だけでは限界がある。公共図書館との交流人事もあるので、連携して情報共有するなど、公共と学校の図書館で力をあわせて行ってほしい。読書習慣をもたないまま大人になっていくという人が今どんどん増えてきているので、図書館が研修や講座などを実施してもらえれば参考になることも多く、学校としてもできることがあるのかなと考える。

●委員長

少なくとも、読書に関して、学校から見えていることと図書館から見えていることをきちんと交流させていくという機会は、もう少し密にしていくほうがいい部分はある。本当に不読者層、本を読まない割合というのは随分減っているが、結局、朝読書で本を読んでいるということで減っている部分がかなりの割合を占めると考えると、諸手を挙げて喜べる状況では決してないなというふうに思ってしまう。

●委員

学校については、読書の時間などの授業で、どの子もそういう経験が持てるし、そっちのほうでも豊中はすごく頑張っていると思うが、もっと頑張って欲しいと思っている。昼休みや放課後に学校図書館に行くことは、いろいろな理由で出来ない事もあるが、授業でするとなったら、やっぱりちがうと思う。学校現場ではそこが大きいと考えている。

●委員

小学校では読書の時間があり、地域の方が読みきかせをしたりしているが、中学校の場合は、授業のなかで読書の時間というのはなかなかとれないので、朝読書の 10 分間ということをやるのが精一杯かなというふうには思う。

●委員長

学校図書館の役割について学校図書館法では、最初に「学校の教育課程の展開に寄与する」ということが挙げられ、それに続いて「児童又は生徒の健全な教養を育成すること」を目的として設けられているとある。学校図書館が学校にあることの意味というのは、やはり学校の教育課程にいかに関わっていくかという

ことであるとすれば、このあたりについても、図書館との協力の中で少しでも前に進むようなかたちがとれれば、ありがたいなというふうに思っている。

●委員

子どもたちがあまり本を読まないという話にも関わるが、本がなぜ必要かというと、例えばクイズ番組で答えるくらいの内容であれば、インターネットで調べればいいが、起業するとか論文を書くとか、実験するとか子育てをするという段階になってくると、知識ではなく実践が必要になってくる。具体的に自分はどうすればいいのかと考えるところまで行かないと問題解決にはならないので、インターネットの知識では不十分なことが多い。適切な例かどうかは分からないが、個人的な話になるが保険料を振り込むことになった時、金額の端数が毎月変わるが、担当者の人は毎月大体同じですよと言うが、振込みは大体同じぐらいでは振り込めなくて１円単位まで分からないと振込みができない。物事で何か自分がアクションをおこすとなると細かいところまで知らないとダメなので、インターネットでの知識だけでは不十分だと思う。子どもというのは、知識を手に入れる段階なので、そこまでは必要ないのでやっぱりインターネットで終わってしまうのかなという気がする。自分で音楽を演奏したりスポーツをしたりとかして、何か壁にぶつかった時に本気でそれを解決しようと思ったら、やはり詳しい情報がほしくなり、インターネット情報だけでなく自然と本に向かうと思う。本を読みたくなるということは、自分で何かをしようとしている人や実際にしている人だと思うので、そういうかたちで図書館の利用が増えてくるということは自分で何かアクションをおこしている人が増えてきているということなのではないかと思う。

●委員長

今の発言は、いわゆる本のもっている力というものを伝えてくださっていると思う。その前の委員の発言にあった図書館の働きを、より違う視点で伝えていくことへの働きかけに重なってくる部分もあるかと思う。そうした意味も含めて新年度以降に少し膨らませる議論ができればいいだろう。他にご意見ありますか。中央図書館構想についての討議はここまでにしておきたい。事務局で今までの議論をまとめていただき、本日委員から意見のあったことも踏まえながら、少し目に見えるかたちにしてもらいたい。特に、資料の「中央図書館機能イメージ」をもう少し分かりやすく工夫をしていただけるとありがたい。事務局よりその他について説明をお願いします。

●事務局

ご議論ありがとうございました。次年度は、今年度の議論をベースにしながら、中央図書館機能を持った図書館を核とする豊中全体の図書館の施設配置や機能分担のあり方についてお願いしたいと思っているので、またよろしくお願いいたします。その他ですが、図書館協議会や評価部会等で、図書館でやっていることがあまり上手くＰＲできていないというご指摘をいただいており、今回そういうところにも力を入れるということで、図書館の紹介動画を作成した。図書館で行事や講座の開催時等で、早めに来館された方向けに図書館の紹介ということで見ていただくことにしている。今後は、もう少しブラッシュアップしていきたいと考えているので、ご覧になって何かご意見がありましたらお願いします。（動画鑑賞）

●委員長
各図書館の分も出来るのですね。楽しみにしている。

●委員
今度作るときは、各図書館の地域性なんかを前面に出していただくと、分かりやすくなると思う。それと、少し残念だったのが「ぶっくる」（動く図書館）は、ステーションによってはすごい利用があるのに、それがあまり伝わってこなかった。いつもすごく並んでいて。私の家の近所のステーションは４時までだが、４時 10 分くらいに行ってもすごい行列が出来ているので、ぎりぎりに返しに行くことがよくある。もうちょっと、利用者が多いステーションを選択したほうがよかったと思う。

●委員
バックグランドの音楽は、長く同じ曲を聞かされると、頭がぼーっとしてくる事もあるので、曲のメリハリがあったほうが良かったのではないか。音楽がパッと変わると、意識が戻るときがある、次回作られる機会があったら、曲の選定は良いと思うが、使う長さをもう少し考えていただけたら。

●委員長
貴重なご意見ありがとうございました。私からは、子どもたちのことも配慮して、必要なところはルビがあってもいいかなと感じた。そのあたりも含めて、使いながらいいものにしていってください。
以上で、第３回の豊中市立図書館協議会を閉会いたします。